

互惠的相互依存関係に関する予備的研究
—依存欲求と支援欲求の構造, および,

互惠的相互依存関係過程モデルの提案—

A Pilot Study on Relations of Reciprocal Interdependency
— Structures of Dependency Needs and Support Giving Needs and
Proposal of Reciprocal Interdependency Process Model —

田中 優*

Masashi TANAKA

〈キーワード〉

互惠的相互依存関係, 依存欲求, 支援欲求, 互惠的相互依存関係過程モデル
Relations of Reciprocal Interdependency, Dependency Needs, Support Giving Needs,
Reciprocal Interdependency Process Model

〈要 約〉

本研究では, 依存欲求尺度と支援欲求尺度を下位尺度とする互惠的相互依存関係尺度を作成する予備的な研究として, 互惠的相互依存関係における依存と支援の双方向のやりとりについて, 個人が抱く依存欲求, および, 支援欲求の両構造が解明された。まず, 田中(2003)で作成された依存欲求尺度(20項目), および, これを基に作成した支援欲求尺度を, 関西地区の大学生227名(男子125名, 女子102名)と短期大学生110名(男子7名, 女子103名)および, 関東地区の女子大学生79名の計416名(男子132名, 女子284名)にそれぞれ実施した。両欲求について, 探索的因子分析の結果を参考に, 検証的因子分析を行ったところ, 依存欲求については, 『相談・コミュニケーション依存』, 『情緒的依存』, 『道具的依存』, そして, 『指導・アドバイス依存』の4因子構造が, また, 支援欲求については, 『相談・コミュニケーション支援』, 『情緒的支援』, 『道具的支援』, そして, 『指導・アドバイス支援』の4因子構造がそれぞれ明らかになった。そして, 依存欲求と支援欲求の各下位尺度, および, 項目について, それぞれで対応する構造であることが認められた。また, ある程度継続する互惠的相互依存関係の強化, 維持, 解消を説明する互惠的相互依存関係過程モデルを提案した。

問題

対人関係における双方向の影響過程

われわれは、対人関係の中で、援助やサポートを、あるときは「与えられ」、またあるときは「与える」ということを多く経験している。つまり、ある程度継続的な対人関係においては、依存「する側」と「される側」との双方向のやりとりがあり、現実的には、その関係が交互に入れ替わることが多いのである。対人関係における双方向の影響過程について、たとえば、大日向（1988）は、一般的にはサポートを受け取る存在であると考えられがちな乳幼児でさえ、母親の存在を支える存在であり、その意味でサポートの送り手であることを指摘している。また、高橋（1990）は、愛着の研究において、乳幼児が養育者から「与えられる」だけの一方的な関係であったものが、高齢者においては、「与えられ」、同時に、「与える」という双方向の関係性に関心を向けることの重要性を指摘している。また、西川（1997）は、援助要請行動は、援助者と被援助者との関係成立過程の初めの段階で生起する行動であり、継続的な援助関係を理解するためには、まず援助の要請とそれへの反応を取りあげることが重要であるとして、主婦が親友や隣人との間で交わす日常的な援助行動の特徴を、援助要請者と被援助要請者の双方の視点から明らかにしている。さらに、ソーシャル・サポートの研究では、飯田（2000）は、1980年代から20年の間に行われた高齢者に関するソーシャル・サポート研究を概観し、これまで明らかになったことと研究の流れについてまとめている。そしてその中で、ソーシャルサポートでは、サポートの受け手がときには送り手にもなること、つまり、サポートは互いに交換されているという事実根拠に根ざした研究がでてきていることを指摘している。ソーシャル・サポート関係の互惠性についての研究の多くは、社会的交換理論の衡平理論（equity theory）によるものであり、自他の交換率に均衡が取れている状態を、互惠的（均衡）状態といい、互惠の状態は、過剰利得状態や過小利得状態よりも、心理的適応にとってはよい

という知見が報告されている（Antonucci & Jackson, 1990；周・深田, 1996；福岡, 1999）。

Johnson（1993）は、1980年代後半までの欧米の心理学、社会科学、臨床医学の文献にみられる「依存」という概念について概観し、最近では、依存の相互行為的で互惠的な、そして社会象徴的な性質を表すのに、「相互依存（interdependency）」という語が用いられるようになっていと述べている。ここでいう「相互依存」とは、互いに相手をさまざまな形で必要とし、利用しあっている結びつきにみられる、互惠的行為の相互作用としての性質を強調するものである。Cohler & Geyer（1982）は、自律と自立（autonomy and independence）が、成人の対人関係において理想の形態であるとされているけれども、家族や現実の対人関係においては、相互依存の形態はより現実的な特徴であると述べている。また、Gurian（1984）は、依存を相互的なものとみている。つまり、依存する側はある反応を得ることを求め期待しているが、他方、満足させる側もそのような反応をするつもりであり、そのような相互行為は義務的なものである。また、依存する者は、援助を求め恩を返すことを期待されており、この義務の輪の中に入り損なうと、非難をあげることから追放にいたる一連の反応を引き起こしかねないとしている。Johnson（1993）は、依存と自立（＝非依存）という理念的な二分法は、現実を過った解釈に導くことを強調しながら、相互依存という概念を用いることにより、生涯を通じて人間が実際にお互い寄りかかり支えあう複雑なありさまを思い描くことが可能になるとしている。

依存欲求と支援欲求との関連

互惠的相互依存関係において、個人が抱く依存欲求と支援欲求との関連については、田中・高木（1994）が、大学生を対象として、同性の友人関係における両欲求の構造、および、個人における両欲求の関連性を、それぞれ以下のように明らかにしている。まず、依存欲求の構造については、男女とも「情緒的、道具的、そして、支持」の3

つの機能を友人に期待していた。他方、支援欲求の構造については、男子では、「情緒的、道具的、そして、支持」の3つの機能について友人を支援したいと望んでいた。しかし、女子では、友人の依存欲求が示されたのちにそれを支援したいと解釈できる「受動的支援」と、自ら進んで積極的に支援したいと解釈できる「積極的支援」の2つの次元が加わった形の、「受動・情緒的、積極・情緒的、受動・道具的、積極・道具的、そして、支持」の5つの機能について友人を支援したいと望んでいた。さらに、個人が抱く「依存欲求」と「支援欲求」との関連について正準相関分析を行ったところ、女子では、たとえば、友人への情緒的依存欲求を強く抱く者は、友人からの情緒的依存欲求を受動的に充足させたいというように、自分が友人に求める依存の機能と、同じ機能の充足を友人にも提供したいと望んでいたのである。しかし、男子では、たとえば、友人への情緒的依存欲求を強く抱く者は、友人からの情緒的依存欲求を充足させ、かつ、友人からの支持欲求をも充足させたいと望んでいた。つまり、男女で、その対応関係は異なるものの、依存欲求と支援欲求とは、強く抱く機能について、対応関係があることが明らかになった。

しかし、田中・高木（1994）で用いられた依存欲求尺度において、その下位尺度である「道具的依存」を構成する項目は、「何でも話したい」、「ぐちを聞いてほしい」、「相談したい」など、ほとんどが「コミュニケーション」や「相談」に関する項目であり、「道具的な助力」を表す項目、たとえば、「できない仕事を手伝ってほしい」や「探し物を手伝ってほしい」などは尺度に含まれていなかった。また、「間違いや欠点を指摘してほしい」などの「指導」や「アドバイス」を他者に求める項目は、尺度に含まれていなかった。さらに、支援欲求尺度については、依存欲求尺度の「～してほしい」という表現を「～してあげたい」という表現に変えたものであった。これらのことから、依存欲求、および、支援欲求の両構造、そして、両欲求の関連について、新たな依存欲求尺度、および、支援欲求尺度による再検討が

必要であると考えられた。そこでまず、田中（2003）では、田中・高木（1994）の依存欲求尺度を基に、新たな依存欲求尺度が作成された。

目的

本研究では、依存欲求尺度と支援欲求尺度を下位尺度とする互恵的相互依存関係尺度を作成する予備的な研究として、互恵的相互依存関係における依存と支援の双方向のやりとりについて、個人が抱く依存欲求、および、支援欲求の両構造を解明することを目的とする。また、ある程度継続する互恵的相互依存関係を、個人が抱く依存欲求と支援欲求との様相から捉え、その関係の強化、維持、解消を説明する互恵的相互依存関係モデルを提案する。

方法

調査対象者は、関西地区の大学生227名（男子125名、女子102名）と短期大学生110名（男子7名、女子103名）および、関東地区の女子大学生79名の計416名（男子132名、女子284名）であった。

依存欲求の測定には、田中（2003）の依存欲求尺度（20項目）が用いられた。それぞれ、「私のことを考えていてほしい」、「思い出だけで心のやすまる存在でいてほしい」、「私が元気であるか気にかけてほしい」、「私の心の支えてほしい」などから構成される『情緒的依存』。「私のぐちを聞いてほしい」、「私の話し相手になってほしい」、「私の悩みを相談したい」、「何でも話したい」などから構成される『相談・コミュニケーション依存』。「重要な決心をするときは意見を聞きたい」、「私の知らないことを教えてほしい」、「私の間違いや欠点を指摘してほしい」から構成される『指導・アドバイス依存』。そして、「私ができないことを代わりにやってほしい」、「難しい仕事を手伝ってほしい」、「探しものをするとき、手伝ってほしい」などから構成される『道具的依存』の4つの下位尺度から構成されている。

支援欲求の測定には、田中（2003）の依存欲求質問項目の表現（「～してほしい」等）を、支援を与える側の表現（「～してあげたい」等）に置き換えた支援欲求尺度（20項目）が用いられた。それぞれ、「Aのことを考えていてあげたい」、「Aにとって、思い出すだけで心のやすまる存在でいたい」、「Aが元気であるかどうか、気にかけていてあげたい」、「Aの心の支えでいてあげたい」などから構成される『情緒的支援』。「Aのぐちを聞いてあげたい」、「Aの話し相手になってあげたい」、「私に悩みを相談してほしい」、「私に、何でも話してほしい」などから構成される『相談・コミュニケーション支援』。「重要な決心をするときは、私に意見を聞いてほしい」、「Aの知らないことを教えてあげたい」、「Aの間違いや欠点を指摘してあげたい」から構成される『指導・アドバイス支援』。そして、「Aができないことを代わりにやってあげたい」、「Aにとって難しい仕事を手伝ってあげたい」、「探しものをするとき、手伝ってあげたい」などから構成される『道具的支援』の4つの下位尺度から構成されている。

調査は、授業の終わりに「青年期の対人関係」という名目でそれぞれ実施された。調査は無記名であり、結果は研究以外の目的には使用されないことが説明された。被調査者には、日常生活に有意義な関連を持つと想定される対象、すなわち、母親、父親、同性の親友、そして、異性の親友の4対象について、依存欲求尺度、および、支援欲求尺度の各20項目に表された内容が、自分にどの程度あてはまるのかについて評定することが求められた。評定の選択肢は、“あてはまる”、“少しあてはまる”、“どちらでもない”、“あまりあてはまらない”、“あてはまらない”の5件法であった。評定された回答に対して、“あてはまる”から“あてはまらない”の順に、5、4、3、2、1点を与えた。

結果

依存欲求の構造

依存欲求の構造を明らかにするために、まず、

依存欲求尺度20項目について、依存対象を込みにしたデータを用いて、探索的因子分析（主成分分解・バリマックス法）を男女別で、それぞれ実施したところ、男女でほぼ同様の結果を得た。そこで、男女を込みにした同様の因子分析を行ったところ、固有値が1.0以上を1つの目安として、加えて、十分なる説明割合を得ることができ、スクリープロットによる固有値の変化の推移を考慮して4因子が導出された（第4因子までの累積寄与率は、65.8%）。第1因子は、「10. 私の悩みを相談したい」、「1. 私の話し相手になってほしい」、「15. 何でも話したい」、「5. うれしいことや楽しいことを、まず報告したい」、「7. 私のぐちを聞いてほしい」から構成され、『相談・コミュニケーション依存』と解釈された。第2因子は、「6. 私のことを考えていてほしい」、「8. 私が元気であるか気にかけてほしい」、「13. 私の心の支えでいてほしい」、「2. 思い出すだけで心のやすまる存在でいてほしい」の項目から構成され、『情緒的依存』と解釈された。第3因子は、「17. 私ができないことを代わりにやってほしい」、「18. 難しい仕事を手伝ってほしい」、「19. 探しものをするとき、手伝ってほしい」、「16. 身の回りの世話をしてほしい」などから構成され、『道具的依存』と解釈された。そして、第4因子は、「9. 私の知らないことを教えてほしい」、「14. 私の間違いや欠点を指摘してほしい」、「3. 重要な決心をするときは意見を聞きたい」から構成され、『指導・アドバイス依存』と解釈された。また、これらは、田中（2003）と同様の因子構造であった。以上の探索的因子分析を参考にして、検証的因子分析を行った。適合度については、CFI = .893, RMSEA = .054であり、妥当なモデルであることが確認された（図1）。

支援欲求の構造

支援欲求の構造を明らかにするために、まず、支援欲求尺度20項目について、支援対象を込みにしたデータを用いて、探索的因子分析（主成分分解・バリマックス法）を男女別で、それぞれ実施

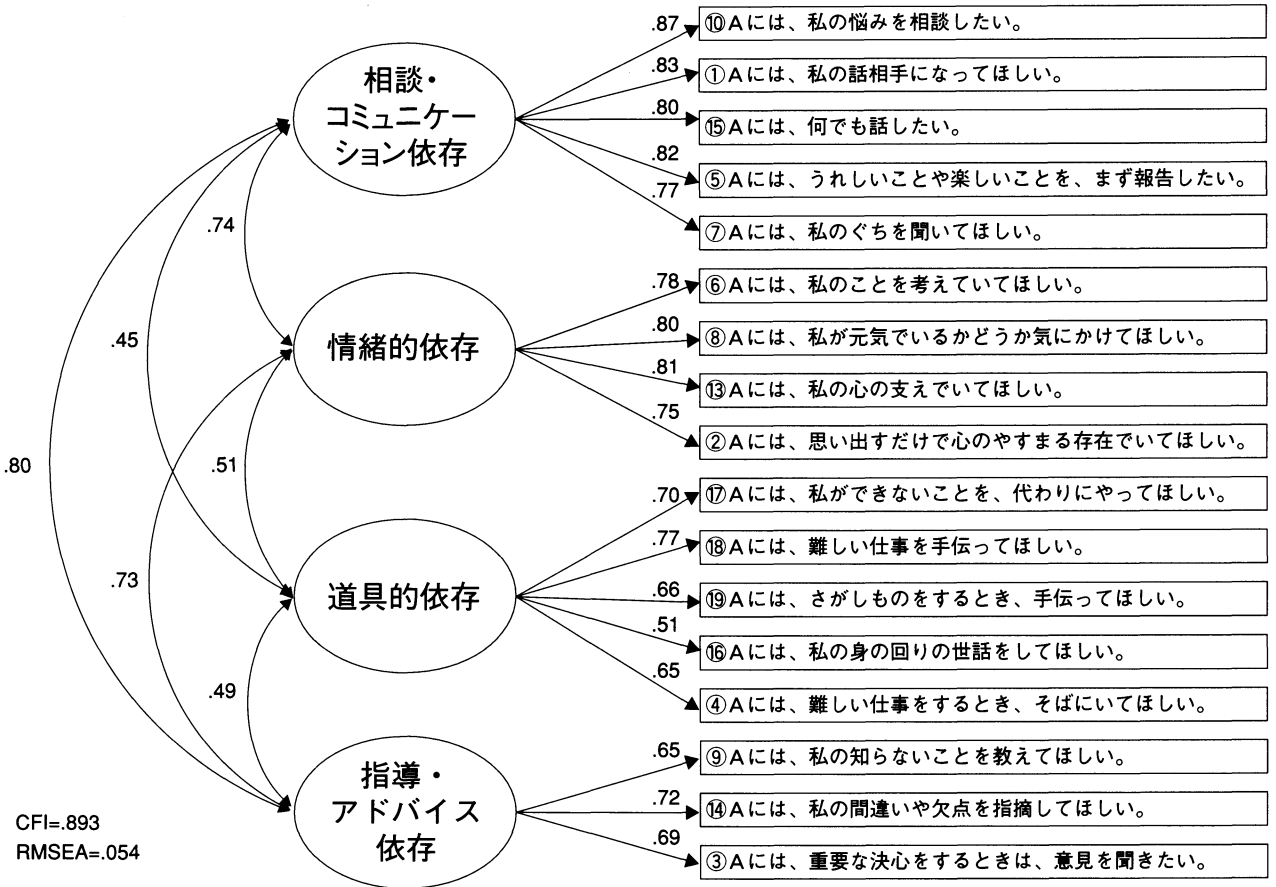


図1 依存欲求構造 (検証的因子分析結果)

したところ、男女でほぼ同様の結果を得た。そこで、男女を込みにした同様の因子分析を行ったところ、固有値が1.0以上を1つの目安として、加えて、十分なる説明割合を得ることができ、スクリープロットによる固有値の変化の推移を考慮して4因子が導出された(第4因子までの累積寄与率は、70.6%)。第1因子は、「10. 私に悩みを相談してほしい」、「15. 私に、何でも話してほしい」、「5. うれしいことや楽しいことを、まず私に報告してほしい」、「7. Aのぐちを聞いてあげたい」、「3. 重要な決心をするときは、私に意見を聞いてほしい」、「11. Aのわがままを受け入れてあげたい」から構成され、『相談・コミュニケーション支援』と解釈された。第2因子は、「8. Aが元気であるかどうか、気にかけていてあげたい」、「6. Aのことを考えていてあげたい」、

「2. Aにとって、思い出だけで心のやすまる存在でいたい」、「13. Aの心の支えていてあげたい」などから構成され、『情緒的支援』と解釈された。第3因子は、「17. Aができないことを代わりにやってあげたい」、「18. Aにとって難しい仕事を手伝ってあげたい」、「19. 探しものをするとき、手伝ってあげたい」、「16. Aの身の回りの世話をしてあげたい」などから構成され、『道具的支援』と解釈された。そして、第4因子は、「14. Aの間違いや欠点を指摘してあげたい」、「9. Aの知らないことを教えてあげたい」から構成され、『指導・アドバイス支援』と解釈された。以上の探索的因子分析を参考にして、共分散構造分析による検証的因子分析を行った。適合度については、CFI=.932, RMSEA=.049であり、妥当なモデルであることが確認された(図2)。

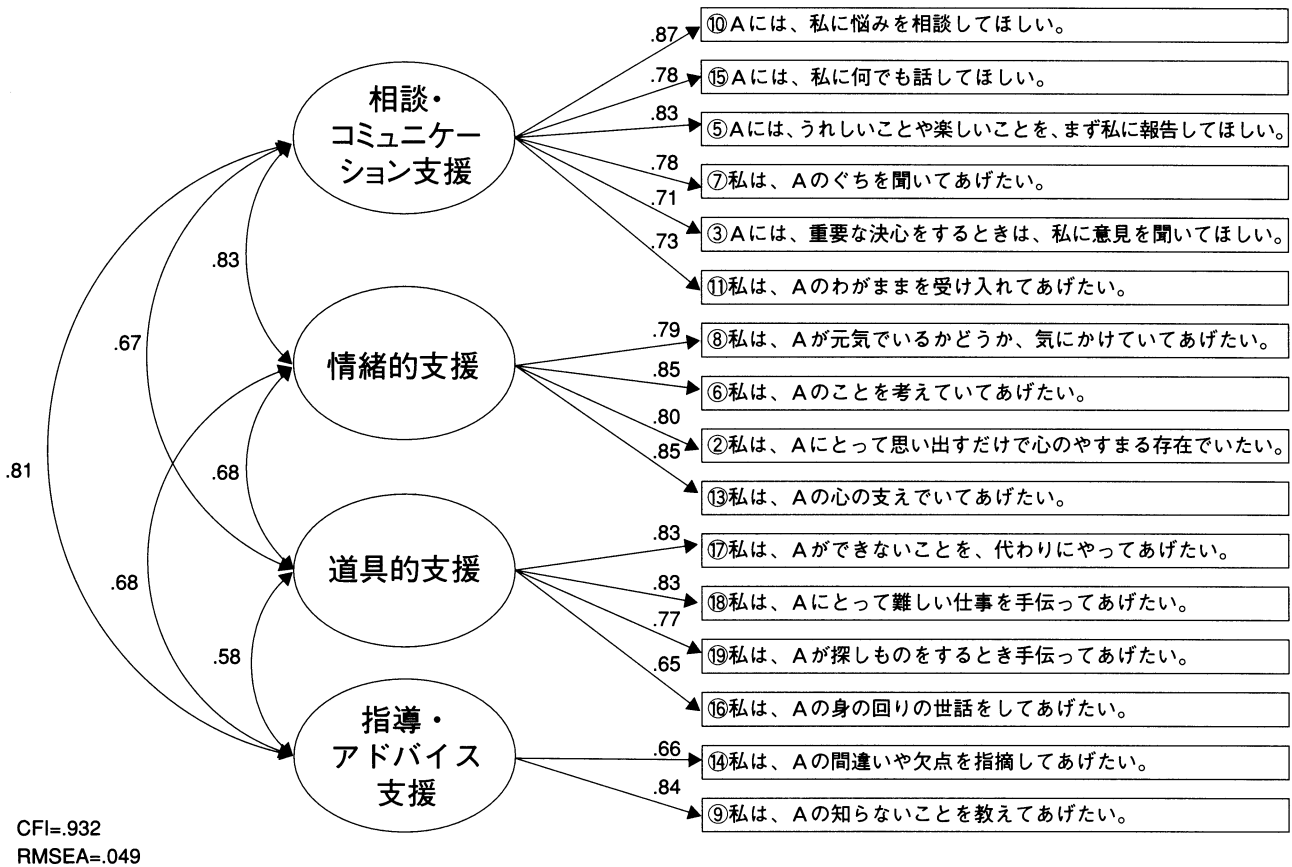


図2 支援欲求構造 (検証的因子分析結果)

考察

依存欲求、および、支援欲求の構造について

依存欲求の構造については、『相談・コミュニケーション依存』、『情緒的依存』、『道具的依存』、そして、『指導・アドバイス依存』の4因子構造が明らかになった。また、これらの因子構造は、田中(2003)と同様の構造であったことから、依存欲求尺度の構成概念妥当性(因子的妥当性)が確認された。また、支援欲求の構造については、『相談・コミュニケーション支援』、『情緒的支援』、『道具的支援』、そして、『指導・アドバイス支援』の4因子構造が明らかになった。

また、依存欲求と支援欲求の各下位尺度、および、項目について、それぞれ対応する構造が認められた。田中・高木(1994)では、男女で、相手

への関わり方の積極性が異なるものの、機能という点においては、依存欲求と支援欲求とは、対応関係があった。本研究で用いた依存、および、支援、両欲求の尺度項目は、田中・高木(1994)の両欲求項目を基に、「道具的」機能により道具的な助力の項目を付加し、さらに、「コミュニケーション」の機能、「指導・アドバイス」の機能の項目を加えたものであった。本研究の結果は、依存、および、支援の両欲求の構造について、田中・高木(1994)に加えた機能が、それぞれ因子として導出され、また、依存欲求と支援欲求の構造は、欲求の機能について、対応していることが示唆される結果となった。しかし、このように、依存欲求と支援欲求の各下位尺度、および、項目について、それぞれ欲求ごとに類似した構造が認められることは、個人が、同じ機能の依

存欲求と支援欲求とを共に強く抱くことを意味するものではない。今後、ある程度継続する対人関係における個人の依存と支援、両欲求の様相を明らかにし、両欲求間の関連を捉えるために、依存欲求尺度、および、支援欲求尺度を下位尺度とする、十分なる信頼性、および、妥当性を有する、互惠的相互依存欲求尺度の作成が必要となるだろう。

互惠的相互依存関係過程モデルの提案

田中（2003）は、「他者からの道具的な支援、あるいは、精神的な支援を求める欲求」を依存欲求、また、「他者への道具的な支援、あるいは、精神的な支援を提供することを望む欲求」を支援欲求とそれぞれ定義し、個人が抱く依存欲求と支援欲求の様相から互惠的相互依存関係の特徴づけ、ある程度継続する対人関係を説明することの可能性について述べている。本論では、互惠的相互依存関係における依存と支援の双方向の影響過程について、ある程度継続する対人関係を、個人が抱く依存欲求と支援欲求との様相から捉え、その関係の強化、維持、解消を説明する互惠的相互依存関係過程モデル（図3）を提案する。

モデルは、「依存行動過程」、「支援行動過程」、そして、「対人意識」の大きく3つから成り立つ。まず、「依存行動過程」とは、依存欲求、依存行動、依存行動評価過程、評価の結果としての依存の満足・依存の不満足・心理的負債感までの過程である。つぎに、「支援行動過程」とは、支援欲求、支援行動、支援評価過程、評価の結果としての支援の満足・支援の不満足までの過程である。そして、「対人意識」とは、互惠意識、愛他意識、返礼意識の3つの意識である。互惠意識とは、依存行動と支援行動とから成り立つ互惠的な対人関係に対するポジティブな態度であり、依存行動と支援行動を動機付ける。愛他意識とは、他者の幸福や利益を第一の目標とし、愛他行動を動機付ける態度である。そして、返礼意識とは、心理的負債感を低減することを目標とし、他者への返礼行動を動機付ける態度である。

互惠的相互依存関係の強化・維持は、3つの対人意識を経由するルートにより説明される。まず、互惠意識を経由するルートについては、依存行動過程における依存の満足、あるいは、支援行動過程における支援の満足により、互惠意識が高められ、その結果として、依存欲求、あるいは、支援欲求が高められる。また、愛他意識を経由するルートは、依存行動過程における依存の満足により、愛他意識が高められ、その結果として、支援欲求が高められる。そして、返礼意識を経由するルートは、依存行動過程における心理的負債感によって返礼意識が高められ、その結果として、支援欲求が高められる。このように、依存欲求、あるいは、支援欲求が高められることにより、依存行動、あるいは、支援行動が対人関係において活性化され、互惠的相互依存関係が強化・維持されるのである。一方、互惠的相互依存関係の解消を説明するルートについては、依存、および、支援の両行動への不満足な評価は、それぞれ、依存欲求と支援欲求とを低下させる。また、依存行動過程における心理的負債感は、依存欲求を低下させる。これらの依存欲求と支援欲求の低下は、依存行動、あるいは、支援行動が対人関係において不活性化され、依存と支援とから成り立つ互惠的な関係を弱め、関係の解消（無関係）へと繋がるのである。

なお、心理的負債感からの返礼意識による支援欲求は、支援を受けたことに対するお返しとして、支援を与えることであり、特に、一度きりの援助行動など、対人関係の継続性が予想されない場合など、そのお返しにより負債感が解消できれば、それ以後の相互作用の必要はないと考えられる。しかし、関係の継続性が予想される対人関係においては、支援の満足は、互惠意識の高揚をもたらし、依存欲求、および、支援欲求を高めることになり、互惠的相互依存関係の発展、維持へと繋がるのである。

しかし一般に、依存行動、あるいは、支援行動への評価は、満足、または、不満足のどちらかという二者択一ではなく、満足と不満足を同時に経験する場合が多い。また、これらに加えて、依存

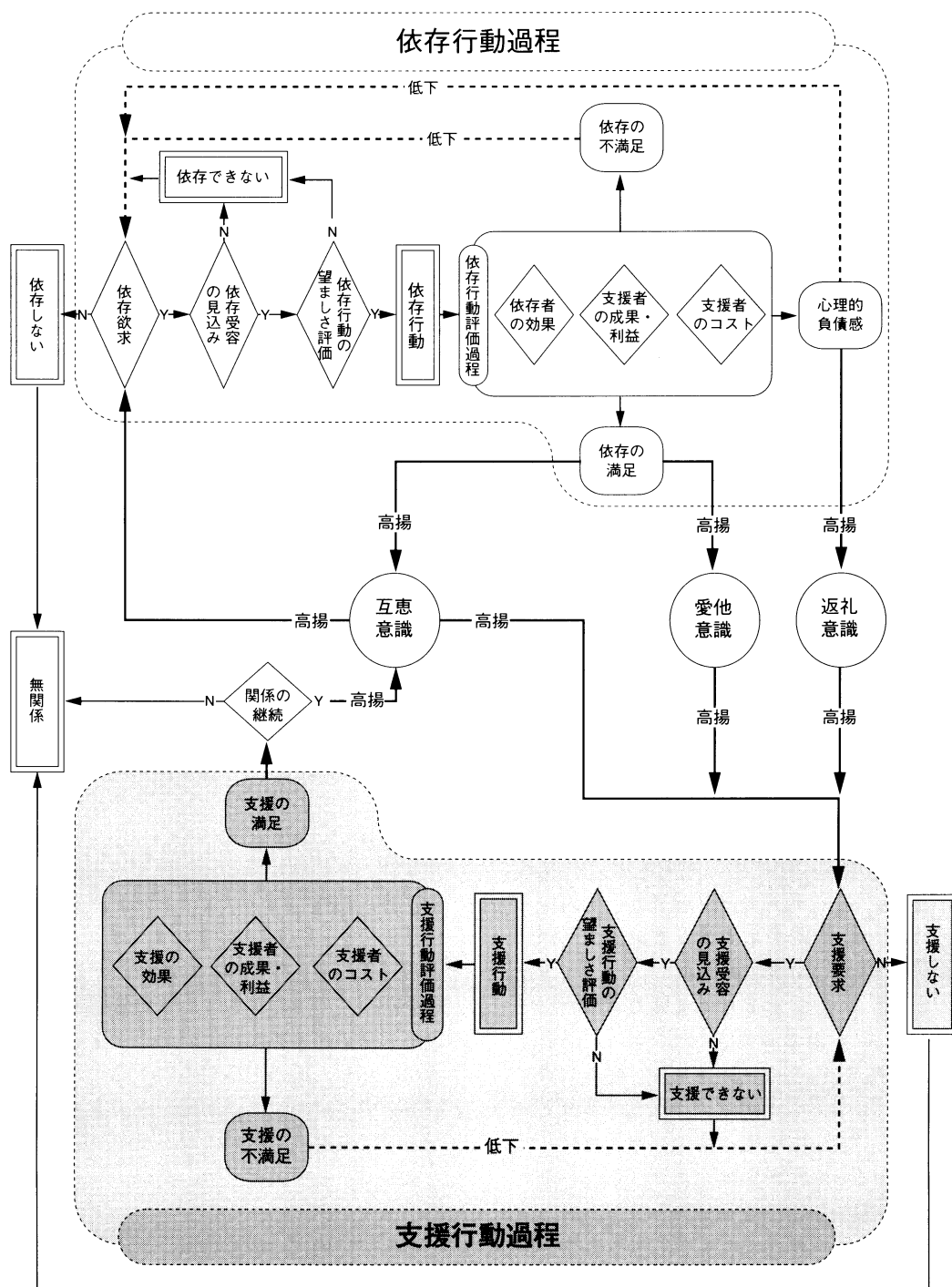


図3 互恵的相互依存関係過程モデル

行動においては、心理的負債感をも同時に経験する場合がある。現実的には、満足、不満足、そして、心理的負債感のすべての反応過程、つまり、関係の強化・維持に向かうルートと解消へと向かうルートとが同時に進行し、その複合的な結果として、互惠的相互依存関係が説明されるのである。

今後は、このモデルの妥当性について、実証的な検討を行い、さらなるモデルの精緻化を図る必要があるだろう。

文献

- Antonucci, T. C. & Jackson, J. S. 1990 The role of reciprocity in social support. In B. R. Sarason, I. G. Sarason & G. R. Pierce (Eds.), *Social Support: An interaction view*. New York: John Wiley & Sons. Pp. 173-198.
- Cohler, B. J. & Geyer, S. 1982 Psychological autonomy and interdependence within the family In. F. Walsh (Ed.), *Normal Family Processes*. New York: Guilford. Pp.196-228.
- Gurian, J. P. 1984 Dependency In J. Gould & W. B. Kolb (Eds.) *A Dictionary of Social Sciences*. New York: Free Press. Pp.189-190.
- 福岡欣治 1999 友人関係におけるソーシャル・サポートの入手—提供の互惠性と感情状態 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 13(1), 57-70.
- 飯田亜紀 2000 高齢者の心理的適応を支えるソーシャル・サポートの質：サポーターの種類とサポート交換の主観的互惠性 健康心理学研究, 13(2), 29-40.
- ジョンソン F. A. 江口重幸・五木田紳 (訳) 1997 「甘え」と依存—精神分析的・人類学的研究—弘文堂 (Johnson, F. A. 1993 *Dependency and Japanese socialization Psychoanalytic and anthropological investigation into AMAE*. New York University Press.)
- 周 玉慧・深田博己 1996 ソーシャル・サポートの互惠性が青年の心身の健康に及ぼす影響 心理学研究, 67(1), 33-41.
- 西川正之 1997 主婦の日常生活における援助行動の研究 社会心理学研究, 13, 13-22.
- 大日向雅美 1988 母性の研究 川島書店
- 高橋恵子 1990 愛情のネットワーク 高橋恵子・波多野誼余夫 (著) 生涯発達の心理学 岩波新書 p. 69-88.
- 田中 優 2003 依存欲求尺度の作成, および, 信頼性と妥当性の検討 大妻女子大学人間関係学部紀要 人間関係学研究, 4, 229-239.
- 田中 優・高木 修 1994 被依存者の心理についての研究 (I) —依存欲求と被依存欲求との関連性について— 日本教育心理学会第36回総会発表論文集, 322

Appendix

依存欲求質問項目

- ① Aには、私の話相手になってほしい。
- ② Aには、思い出すだけで心のやすまる存在でいてほしい。
- ③ Aには、重要な決心をするときは、意見を聞きたい。
- ④ Aには、難しい仕事をするとき、そばにいてほしい。
- ⑤ Aには、うれしいことや楽しいことを、まず報告したい。
- ⑥ Aには、私のことを考えていてほしい。
- ⑦ Aには、私のぐちを聞いてほしい。
- ⑧ Aには、私が元気であるかどうか気にかけてほしい。
- ⑨ Aには、私の知らないことを教えてほしい。
- ⑩ Aには、私の悩みを相談したい。
- ⑪ Aには、私のわがままを受け入れてほしい。
- ⑫ Aには、喜びや悲しみを、共に感じてほしい。
- ⑬ Aには、私の心の支えでいてほしい。
- ⑭ Aには、私の間違いや欠点を指摘してほしい。
- ⑮ Aには、何でも話したい。
- ⑯ Aには、私の身の回りの世話をしてほしい。

- ⑰ Aには、私ができないことを、代わりにやっ
てほしい。
- ⑱ Aには、難しい仕事を手伝ってほしい。
- ⑲ Aには、探しものをするとき、手伝ってほし
い。
- ⑳ Aには、悪い知らせや悲しい知らせを受け取
るとき、一緒にいてほしい。

支援欲求質問項目

- ① 私は、Aの話相手になってあげたい。
- ② 私は、Aにとって思い出だけで心のやすま
る存在でいたい。
- ③ Aには、重要な決心をするときは、私に意見
を聞いてほしい。
- ④ 私は、Aが難しい仕事をするとき、そばにい
てあげたい。
- ⑤ Aには、うれしいことや楽しいことを、まず
私に報告してほしい。
- ⑥ 私は、Aのことを考えていてあげたい。
- ⑦ 私は、Aのぐちを聞いてあげたい。
- ⑧ 私は、Aが元気であるかどうか、気にかけて
いてあげたい。
- ⑨ 私は、Aの知らないことを教えてあげたい。
- ⑩ Aには、私に悩みを相談してほしい。
- ⑪ 私は、Aのわがままを受け入れてあげたい。
- ⑫ 私は、Aの喜びや悲しみを、共に感じてあげ
たい。
- ⑬ 私は、Aの心の支えでいてあげたい。
- ⑭ 私は、Aの間違いや欠点を指摘してあげた
い。
- ⑮ Aには、私に何でも話してほしい。
- ⑯ 私は、Aの身の回りの世話をしてあげたい。
- ⑰ 私は、Aができないことを、代わりにやっ
てあげたい。
- ⑱ 私は、Aにとって難しい仕事を手伝ってあげ
たい。
- ⑲ 私は、Aが探しものをするとき手伝ってあげ
たい。
- ⑳ 私は、Aが悪い知らせや悲しい知らせを受け
取るとき、一緒にいてあげたい。